

## チヨースーと中世ヨーロッパ文学伝統 — チヨースー文学の成立に向かって

池 上 忠 弘

ジェフリー・チヨースーは中世イングランドでも極めて稀な国際的詩人であった。狭い島国の詩人だけではなく、ヨーロッパの詩人にもなることを目指した。彼自身は少年の頃から王室に終始仕えながら創作活動を続けていった。そこで、彼の生涯——社会的環境を辿りながら、フランス語・ラテン語中心の宮廷社会と活気あふれるロンドン市にあって「英語」を文学表現の言語に押しあげ、同時代のフランス文学・イタリア文学との接触を経て大成していった過程を探り、その概略を描いてみたい。

### (1)

チヨースーは 1340 年代の前半、1343 年頃ロンドン市のヴァイントリ区テムズ街あたりで生まれた。父親ジョン・チヨースーは裕福なワイン商人で、1347 年から 49 年にかけてサウサンプトン港の王室酒類管理室代理としてエドワード 3 世に仕えたこともあった。ワイン業者が多数住む地域にいて、毎日近くのロンドン港で働く外国の船員、貿易商人、銀行業者たちと幼い頃から接していたことだろう。当時のロンドンは人口約 4 万人の大都会となり、北西ヨーロッパ交易の中心地がブルッヘからロンドンに移り変ってきた時であった。フランドル商人、ハンザ商人、ガスコニュ人が沢山来ていたが、あらたに遠隔地貿易や金融業のイタリア商人、とりわけフィレ

ンツェ、ルッカ、ジェノヴァ、北イタリア出身者が目立ってきた。これ迄のイギリスはフランス、フランドル、スペインとの交易の世界にあった。14 世紀のヨーロッパは黒死病、農民一揆、教会大分裂、英仏百年戦争などで不安定で多難な時代であったが、イタリアの大躍進、都市と商業の活性化が見られた時期でもあった。

チョーサーに関する最初の史料は、1357 年 4 月初旬に 4 シリングと 3 シリング、5 月 20 日に 2 シリング、12 月 20 日に 2 シリング 6 ペンスの支払いがあった記録である。これによって、チョーサーがエドワード 3 世 (1312-77、王位 1327-77) 第 3 王子アルスター伯ライオネル (1338-68) の妃エリザベス (1332-63) 家に小姓 page として仕えていたことが分かる。おそらくチョーサーは父親がかつて国王に仕えたことがあり、そのついでイギリス王室に出仕する機会を得たのであろう。この宮廷生活の道を進んで行くのが彼の表の顔である——王室の家臣、外交官、税関会計検査官など。

1359 年 12 月、黒太子麾下のアルスター伯の小軍団に従者 valettus として対フランス戦争に参加し、ランス近郊の戦いで捕虜となった。翌 60 年 3 月 1 日国王が 16 ポンドの身代金を支払い解放された。その直後の 5 月 8 日停戦協定が結ばれ、英軍は 5 月末までに帰国した。10 月 24 日カレーで再確認されたブレティニー和約にはチョーサーは従者として出掛けている。1356 年 9 月 19 日のポワティエの大野戦で捕虜となったヴァロア家フランス国王ジャン 2 世は 400 万エキュの身代金をかけられ、多数の家臣とともに 57 年からロンドンに滞在していた。このジャン善良王の身代金が 300 万エキュに減額され、分割支払いでジャンは 60 年に釈放され、フランス王国の 3 分の 1 (西部と南西部地域) がイギリスに割譲された。フランス国王の解放と入れかわりに 40 名の人質が要求された。その中に国王の 3 人の王子たち、ブルゴーニュ公フィリップ、ベリー公ジャン、アンジュー

公ルイが含まれていた。63年9月捕虜の一行の中のルイがカレーで逐電してしまい、これを怒ったジャン2世は1364年1月自発的にロンドンに戻り、4月8日サヴォイ宮で死去した。ベリー公は結局67年までイギリスに滞在したが、この人物こそ後に贅沢の限りを尽した中世フランス最大といわれるコレクターでかつ有力な文芸のパトロンである。

エドワード3世の悪名高い母親イザベル(1292-1358)はフランス国王フィリップ4世の娘。またエドワード3世の妃フィリッパ(c.1314-69)はエノーのギョーム3世の娘で、フランス文化圏にある。少し時代が先に進むが、黒太子エドワード(1330-76)の息子、後のリチャード2世(1367-1400)は王妃として、アン(1366-94)をプラハから迎えている。彼女は神聖ローマ皇帝、ボヘミア王カール4世の娘。1380年に結婚の交渉がなされ、漸く82年1月20日アン王女は多数の宮廷人を連れて来英、ウェストミンスター宮で結婚式が行われ、ウェストミンスター大修道院で王冠を受けた。こうした洗練された優雅な趣味と社交を習慣とした貴族的なごく狭いエリート文化が、人口約25万で政治・経済・芸術の中心パリと王族所領の中心都市からヨーロッパの全上流社会へと広がっていった。

ロンドンの宮廷はバイリンガルの世界である。チョーサーがフランス語を尊重する国際的な宮廷社会に入るや否や、彼は既に同時代のフランス文化が浸透している世界にごく自然に入り込んでいたことになる。ちょうどギョーム・ド・マシヨール(c.1300-77)の影響がイギリスで強く感じられた頃である。この頃最も人気のあったフランス文学はジャン・ド・マンが書きついだ『薔薇物語』後篇(1275-80年作成)、詩人・作曲家マシヨール、そして詩人ジャン・フロワサール(c.1337-c.1410)の3者である。ギョーム・ド・ロリスの書いた『薔薇物語』前編4000行(1225-40年頃作成)は宮廷風恋愛の主題と夢のアレゴリーの手法を重ねあわせた優雅な物語詩。詩人の語り手が〈閑暇〉の手引きで厚い石の壁をめぐらした〈愉楽〉の庭

園に入り、咲きかけた「ばら」の蕾に手をのばすと〈抵抗〉に阻まれ、「ばら」の蕾は塔の中に閉じこめられるところで中断する。40年後書きついでジャン・ド・マンの後篇 18,000 行は筋書きと人物はつなぎあわせている。〈愛〉の軍勢が「ばら」のいる塔を攻撃し、語り手が遂に「ばら」の蕾を摘むにいたる。ところが〈自然〉と生殖を司る〈ゲニウス〉が威力をもち、〈理性〉と〈友〉が長大な弁論をくりひろげる。前編の抒情的な愛 *fin' amors* 探索の夢物語を痛烈に攻撃するのである。詩で堅い論考を読むような印象を受ける。13 世紀大学で蓄積された哲学・自然学全般にわたる知識の宝庫、百科全書がそこにあり、当時の合理的批判的な側面が厳しく風刺的に表現されている。女性攻撃が顕著で、問題を起している。マンは自らの学識の権威を披瀝したのかもしれない。

詩人で多声音楽作曲家マシヨールは新しい抒情詩の定型詩を完成させた中心人物である。ボヘミア王ジャン・ド・リュクサンブールの秘書として仕え、王の娘ボンヌがフランス王ジャン 2 世と結婚するとフランスの王子たちにも仕え、その後ナヴァール王カルロスにも仕えたりした。「雅びの愛」の韻文物語を書き、バラード、ロンドー、ヴィルレー、シャン・ロワイアルといった「定型詩」を練りあげた。詩人フロワサールはエノー出身で、1360 年代にはイギリス王妃フィリップの秘書を務めた。定型詩や物語詩を書いた詩人ではあるが、最も有名なのは全 4 書の『年代記』作者としてであろう。英仏その他に取材旅行をして直接史料を集めた百年戦争を主題とする 14 世紀騎士道の記録文学である。その中に外交官チョーサーも登場する。また、1385 年マシヨールの甥といわれるウスターシュ・デシャン (1346-c.1406) は自作の詩でチョーサーを「偉大な翻訳家」と誉めた。このように、14 世紀フランスの詩人たちは、実はチョーサーの知り合いか友人であったのだ。同じ文学世界にいた友人同志であった。彼らの文学グループでは英仏のパトロンや詩人たちがさかんに交流していた。イギ

リス王室・貴族たちの主たる蔵書はフランス文学であった。

## (2)

1366年、チョーサーは王妃の女官フィリッパ・ド・ロエトと結婚した。彼女は、エドワード3世の第4王子、ランカスター公ジョン・オヴ・ゴント(1340-99)の愛人(1370年頃)で、後に夫人(1396)となったカサリン・スウィンフォードの姉に当たる。69年頃からゴントとの関係が長く続くことになる。

中世の人たちは自分たちに2つの言語があることを知っていた。ひとつは庶民の言語である「俗語」vernacular、もうひとつは学者・聖職者の言語である「ラテン語」。14世紀もなかばをすぎた頃、「俗語」である英語が学校や法律用語で使われだし、公の言語になってきた。1370年代になると急激にイギリスの宮廷で英語が圧倒的に使われるようになった。百年戦争などの影響で次第にナショナリズムが強くなってきたのかもしれない。チョーサー自身、英語かフランス語で抒情詩などを書いていただろう。彼が文学語として使用する「英語」は宮廷やロンドン周辺で使われている英語(中東部方言)である。次の段階としてフランス語あるいはラテン語で書かれたものを英語に翻訳してみる作業が考えられる。そのためにはまず翻訳に使える英語の語句と文体の見本がないと困る。幸いなことに英語の韻文ロマンスがある。1330年頃ロンドンの写本工房で作られたという英語ロマンス集 *The Auchinleck Manuscript* が現存している。チョーサーもこの写本を見ただろうといわれている。チョーサーはこの英語ロマンスの方法を使って前述の『薔薇物語』を訳してみた。原本は写本1冊、初期刊本1冊が残っている。7692行の未完テキストで、1行～1705行の「A フラグメント」がチョーサーの文章とされている。しかし彼の『善女列伝』

(c.1386-87) の序言で、〈愛の神〉に語り手チャーサーが恋愛の敵だと非難されているところから見ると、ジャン・ド・マンの箇所が問題できびしく叱責されているので、全訳したことであろう。

Thou maist yt nat denye,  
For in pleyn text, withouten nede of glose,  
Thou hast translated the Romaunce of the Rose,  
That is an heresye ayeins my lawe,  
And makest wise folk fro me withdrawe;

(F. 327-31)

彼の英訳は原文と同じ *short couplets* の詩型で、訳文はフランス語の直訳体である。行末は脚韻を整えるため英語韻文ロマンスの常套語句がよく使われている。この翻訳は 1360 年代の後半に試みられたと考えられている。

1368 年までにはチャーサーは国王のエスクワイアの地位を得ていた。同年 7 月 17 日彼がドーヴァーを馬 2 頭連れて通過し、10 ポンドを両替した記録がある。彼がどこに行ったのかは不明であるが、ひょっとしてミラノに行ったのかもしれない。6 月 5 日クラレンス公ライオネルがパーヴィア公ガレアツォ 2 世の娘ヴィオランテ・ヴィスコンティと再婚の結婚式を盛大にあげているからである。これには間に合わないとしても、なにかの用件で婚礼参列団に遅れて向かったかもしれない。この式典にはペトルカもフロワサールも参列しただろうといわれている。クラレンス公は不幸にも同年 10 月 17 日現地で死亡してしまう。墓所はパーヴィアにある。

同じ 1368 年 9 月 12 日、ランカスター公ゴントの妃ブランチ (c. 1341-68) が亡くなる。この死を哀悼してチャーサーはゴントに依頼されたか或いは自発的に、1370 年頃慰めの夢物語詩『公爵夫人の書』を書いた。語り手が不眠に悩みロマンスの本を広げ、「セイスとアルシオーネの話」を読んだところで眠くなって、夢の中で物語が展開される形になっている。

語り手が鹿狩りをしていた森で黒衣の騎士に出会い、その騎士が語る失った者への悲しみと幸せな思い出の再創造がこの夢物語詩の主要な部分である。導入部と終結部はフロワサールの『愛の園』を利用したが、この作品の全構成はマシヨールの『ボヘミア王の御判定』にはほぼ負っており、さらにマシヨールの『愛の泉の物語』『運命の女神の治療法』と『薔薇物語』を活用している。チョーサーが当時流行していたマシヨール流の作品を翻訳・翻案し、自己流に編集して自分の英語のテキストを作り出したということである。古い権威ある作家 *auctor* の書物をこのように利用して再生させるのが中世の作家の常道であった。例えば、12 世紀フランスの『エネアス物語』『トロイ物語』『テーベ物語』『アレクサンドル大王物語』は中世ラテン語作品から訳され、いわば「中世化」された——当時の現代化された——古代物語・ビザンチン物語である。アーサー王物語関係では、ジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリタニア王列伝』を仏訳したワースの『ブリュエー物語』、これを更に英訳したラッハモンの『ブルート』（1300 年頃）がある。この後の 13 世紀の俗語文学の権威書としては、寓意の手法を使いスコラ学の論理的論法を操り、宮廷恋愛道を探究した大学大全ともいえるべき『薔薇物語』が現われる。これらの伝統を受け継いだのがマシヨール流の詩である。

騎士と美しい夫人との出会い、夫人の理想的な美しさの描写、人間存在と運命の女神、彼女への求愛と最愛の女性を遂に得た喜び、二人の僅かであった幸せな人生が気品と高貴をみなぎらせて叙述される。騎士が心にとどく愛情は、アルキビデースの美、ヘラクレスの力、アレクサンドロスの偉大さ、ヘクトルの勇敢、ミネルヴァの知恵、更にはバビロニア・カルタゴ・マケドニア・ローマ・ニネヴェエの富をもってきても、絶対にゆるがないと断言する。その一方で、彼女を女性の鑑であるベネロペとルクレティアにたとえ、彼女に会うことが唯一の喜びで、彼女を愛したことを後悔し

ないと言い切る（1154-87行）。古典文学を対比の権威 *auctoritas* として使う表現法を用いている。嘆きの騎士に応待している語り手は、まことに生真面目で何となくとぼけた、ユーモラスな態度をとり、きわめて効果的である。愛と美と死の哀歌ではあるが、生を称える詩となっている。素朴な英詩の伝統に立ちながら優雅なフランス詩の伝統に入った英語の詩を本格的に作って見せたのである。そういうチョーサー最初の自信作である。

### (3)

チョーサーは正式の記録によると 2 回イタリアに旅行している。第 1 回は 1372 年 12 月 1 日から 73 年 5 月 23 日まで、174 日にわたるジェノヴァとフィレンツェへの公務出張である。チョーサーは外交官の立場で 2 人のイタリア人高官ジョン・ド・マーリとジェイムズ・ド・プロヴァンに随行し、「ドイツ・ルート」を通して冬のアルプスを越え、まずジェノヴァに向かった。ジェノヴァ船が来英した際のサウサンプトン港使用の問題とジェノヴァ海軍の援助要請である。ついでプロヴァンとチョーサーはフィレンツェにいった。目的は記録されていないが、エドワード 3 世が多額の金融援助を受けているバルディ銀行などとの取引であったろう。当時のフィレンツェはヴェネチア、ジェノヴァと並んで西ヨーロッパで最も繁栄していた都市国家である。人口約 9 万、教会 110、病院 30、銀行 80、羊毛組合の仕事場 200 以上とされている。

世界の西端にある島国から来たチョーサーはこの大都会を見て、さぞびっくりしたことだろう。とくにチョーサー文学にとって重大なことはダンテ（の『神曲』）発見である。フィレンツェから追放されて死んだ詩人政治家ダンテ（1265-1321）の名誉回復に努め、世間にその偉大な存在を知らしめた人物は、実は作家のボッカッチョ（1313-75）である。彼はフィレンツ



ェで生まれ育ち、生涯フィレンツェ市のために働いた。1327年フィレンツェの商人であった父親ボッカチーノがバルディ商会のナポリ支店長として赴任するとき、彼も同行し同支店で徒弟奉公することになった。この仕事は彼には向いていなかったらしく、30-31年には大学 Studio で教会法研究そしてラテン古典を学びはじめた。そのナポリ時代に書いたのが『フィローストラト』(1335)と『フィローコロ』(1338)である。1340年にフィレンツェに帰り、『テセイダ』(1341)と『愛の幻』(1343)、大作『デカメロン』(1348-51)を書いた。彼がダンテを知るようになったのは1347年頃からである。1350年、ボッカッチョは1341年ローマで桂冠詩人となりラテン詩人として知られたペトラルカ(1304-74)と初めてフィレンツェで知り合い、以後尊敬する詩人との親しい交際が続く。51年春、ボッカッチョはパドヴァにいる詩人を訪ねた折、詩人が『神曲』を持っていないことを知ると、フィレンツェに戻るやすぐ写本工房で『神曲』の写本を購入して詩人に贈った。この写本はヴァチカン写本として現存する。詩人ペトラルカは今日『カンツォニエーレ』の詩人としての方が有名であるが、当時はむしろヨーロッパ各地を旅行し、古文書を探索するラテン詩人であった。長らく南仏のアヴィニョンに住んでいたが、1353年最終的に南仏を去り、北イタリアに帰住することになる。詩人との交友からボッカッチョの著述は俗語作品からラテン語作品へと移り、それもラテン語の史伝や神話関係の知識の集成作を書いた。ギリシア文学に対する関心も強かった。1373年、ペトラルカは『デカメロン』の巻末を飾る「グリセルダ物語」(チョーサーの「学僧の話」の種本)を自らラテン語に訳し、手紙を添えてボッカッチョに送った。このラテン語訳によって『デカメロン』が広くヨーロッパで知られるようになったといわれる。

『神曲』には、ダンテの死後、注釈書や解説書が少しずつ出ている。遅くとも1368年には、遠くイギリスに『神曲』の写本が到達したといわれ

ている。若きダンテの愛読書は、ボエティウスの『哲学の慰め』、ウェルギリウスの『アエネイス』、ホラティウスの『詩論』、オウィディウスの『変身物語』であった。それに加えて、中世フランスの『薔薇物語』なども読んでいた。この古典文学伝統と同時代フランス文学伝統を表す書物は、チョーサーや当時のフランス詩人たちも共有するヨーロッパ的世界であった。もちろん、ボッカッチョも含めて。ボッカッチョは早くに 1351 年『ダンテ頌小論 第 1 版』を書いた。1373 年 8 月、チョーサーが帰国した直後であるが、フィレンツェ市から、連日『神曲』の公開講義をして欲しいという依頼を受けた。それに応じて、10 月 23 日の日曜日、大修道院付属サント・ステーファノ教会において講義が開始され、40 回目の『地獄篇』第 17 歌 17 節の途中まで進んだところで、病気のため中断してしまった。75 年 12 月 21 日、チェルタルドで亡くなった。このときの講義の草稿を増補してつくられたのが教本『ダンテ注釈』である。

きびしい旅を経て、前述したフィレンツェ市の現場にきて、チョーサーは 14 世紀のダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョの文学に直接触れると共にその背後にある古代・中世のラテン文学にも出会ったのである。『名誉の館』(1375, 1378, 1379-80) はチョーサーがダンテの『神曲』を読んだ衝撃が如実にあらわれている作品である。『公爵夫人の書』を書いた自信がぐらつき、伝統的なフランス夢物語詩の形式をとりながら、全く新しい素材を取り入れ混乱した新作をものしている。古典風に 3 巻本の体裁をとり、神への祈りを付けていながらミューズの女神たちにはなく、それぞれ眠りの神モルペウス、ウェヌス、アポロに祈願している。12 月 10 日の夜、夢の中で物語が展開する。第 1 書では、語り手はガラスでできたウェヌスの寺院に入り、壁にかかった銅板に書かれた『アエネイス』の冒頭部分の英訳を読みあげることから始まり、ウェルギリウスの名作の梗概が語られる。

ところがこの語りがアエネアスとカルタゴ女王の恋愛事件だけに集中し、オウィディウスの『名婦の書簡』も取りこんで、英雄アエネアスはディーダーを捨てた裏切者扱いを受ける。「ダンテ」(450行)の名前が英文学で初めて登場している。第2書では、ユピテル神の使者たる鷲が曠野にでてきた語り手「ジェフレー」(729行)を掴み、愛の神に仕えていることを嘉して名声の館まで運んでいく。その途中で、空中を飛びながら鷲がさまざまな学問を語り手に話してきかせ、うんざりさせる愉快的対話場面となる。(『神曲』ではウェルギリウスが案内人。鷲は「煉獄篇」9歌、19-20歌、「天国篇」18-20歌に出てくる。)その目的地は、鷲の説明によると、

And thus this god, thorgh his merite,  
Wol with som maner thing the quyte,  
So that thou wolt be of good chere.  
For truste wel that thou shalt here,  
When we be come there I seye,  
Mo wonder thynges, dar I leye,  
And of Loves folk moo tydynges,  
Both sothe sawes and lesinges,

(669-76)

である。第3書はオウィディウスの『変身物語』12巻に基く名声の館と噂の館をめぐる物語である。ここでも、なぜか分からないが、ボッカッチョを指す「ロリウス」Lollius (1468行)という名前がはじめて出てくる。あらゆる音と言葉が次々と〈名声〉女神の宮殿に押し寄せ、そこからまた方々へ、嘘と真をかかえて放散していく。そこに立って見ている語り手は、そこに居る理由を人に問われて、

Quod y, “That wyl y tellen the,  
The cause why y stonde here:

Somme newe tydynges for to lere,  
Somme new thinges, y not what,  
Tydynges, other this or that,  
Of love or suche thynges glade.

(1884-89)

と答えると、ついで噂の館へ案内される。突然「大きな権威をもった人」(2158)が登場して終わる。チョーサーはダンテの行き方を見て、詩人の使命、英語で詩作する意義、権威や名声のありようなどの課題を模索しているようだ。Robin Kirkpatrick (1995) の説明によれば、チョーサーは『神曲』「地獄篇」2 歌、「煉獄篇」9 歌、「天国篇」1 歌から巧みに名声、伝統、権威という主題を引き出しているという。そこには、言語の混乱、詩人たちにまつわる評判、言語表現の可能性と相対性、ヴォイス (音)、言葉のウソとマコトが表現されている。チョーサーは自分の詩を、古典作家と同時代の俗語作家を含むヨーロッパ文学伝統の中にすえようとする。しかし、その中で権威を持ちたいと願いながらも、たえずその欲求が疑われている。それが語り手のコミックな自画像にあらわれている、といえる。

ダンテはラテン語で書いた『俗語詩論』の中で、イタリア語の「俗語」(トスカーナ語) はラテン語に拮抗しうる表現法をもつ潜在力がある、といっている。ダンテはそれを『神曲』で見事に示してくれた。これによってチョーサーは「英語」を本格的な文学語として使うことに確信をえたのである。しかし、ダンテの道——あまりにも宗教的、あまりにも政治的であるきびしい行き方をチョーサーは取らなかった。彼はむしろボッカッチョの道を選んだ。ともに人間世界への限りない関心があり、ボッカッチョの若かりしナポリ時代に書いた俗語作品群を中年の外国人チョーサーは漸く見つけた。彼らは同じ商人階級の出身、都市文化と宮廷文化と広い古典研究への関心とを共有する同じ知識階層に属する文人であった。

#### (4)

1374年5月10日、チョーサーはロンドンのオールドゲイト門2階の家を無料で借り、6月8日にはロンドン港の羊毛税関会計検査官（年俸10ポンド）に任ぜられ、1386年まで安定した生活が続く。しかし政情は慌しく、1376年6月8日黒太子が死去、1377年6月22日には国王エドワード3世が亡くなり、黒太子の息子が僅か10才でリチャード2世（1367-1400）として即位、ランカスター公ゴントが後見人となる。前回のイタリア旅行から帰国して5年間、チョーサーは頻繁に海外へ出掛けている。77年4月から6月にかけて国王特使として英仏和平交渉にあたっている。第2回のイタリア旅行は、1378年5月28日から9月19日にかけて、エドワード・ド・バークレーに同行してミラノに赴く。目的はミラノ大公ベルナボ・ヴィスコンティ（およびパーヴィア公ガレアッツォ2世）と傭兵隊長ジョン・ホークウッドとの会見である。戦況が悪化してきた英仏戦争への援助要請であることは明らかである。

ミラノは全ヨーロッパ中に知られた詩人ペトルルカがベルナボの叔父、大司教ジョヴァンニ・ヴィスコンティの強い招聘によって1353年から8年間滞在した所である。ミラノの経済的繁栄に支えられたヴィスコンティ家は代々文芸・学問のパトロンを自負し、有名人を招いていた。とくにパーヴィア城内の図書館は、イタリアの手稿類、ラテン語をはじめとする古典作品、フランス語の膨大な写本類を所蔵していた（その多くは現在パリの国立図書館に保管されている）。ここでWilliam E. Colemanの興味深い仮説(1982)がある。ガレアッツォ2世の収集物ははじめからペトルルカの援助を受けていた。チョーサーのミラノ滞在は1378年の7月初旬から8月下旬までの1カ月半と推定されているが、この間パーヴィアを訪問したであろう。1426年作成の同図書館財産目録に記載されていた『フィロース

トラト』(1335年作成)、『トロイルスとクリセイデ』の種本)と『テセイダ』(1341年作成)、『騎士の話』などの種本)の写本の写しを作ってイギリスに持ち帰ったであろうと言われている。或いは前回のフィレンツェ訪問中か、ミラノの周辺で問題の写本その他を見つけて購入したかもしれない。ただ疑問点としては、チョーサーが「ロリウス」という名前を使っていて、「ボッカッチョ」に類する名前が見つからないことである。作者の名前を知らずに作品名だけは知っていたということになるのだが。ボッカッチョのこの2つの作品はチョーサーが手許において、1行1行、あるいはまとめて英語に書き換えていることは確かである。僭主ベルナボ・ヴィスコンティ(1385年12月19日死亡)は、「修道士の話」(Ⅶ. 2399-2406)で現代の実例として扱われ、しかもボッカッチョのラテン語作品『名士伝』(1355年ごろ)に依っている。同じ商人出身のボッカッチョはどうやらチョーサーの性分に合った作家であった。

1370年代後半チョーサーは『テセイダ』の実験的模倣作品『アネリダとアルシーテ』を試みてから『鳥たちの議会』(1380年頃)に辿りつく。今日14冊の写本、キャクストン版1冊が現存しており、ジェントリ階級、商人、修道女が所有していた。rhyme royal stanzaの新しい詩型を使った夢物語詩は、「人生は短く、技術を学ぶには時間がかかる」という有名な格言から始まる。語り手が古ぼけた、マクロビウスの『スキピオの夢注釈』を読み、公益に資することの重要性を学ぶと疲れて眠ってしまう。夢の中でスキピオ・アフリカヌスが語り手をウェヌスの庭園に案内する。そこで2種類のウェヌス像の場面を見て、良いウェヌスと悪いウェヌスを知る。前者は自然と調和し、結婚と生殖を勧めるもの。ウェヌスの寺院に入り、また庭園に戻って〈自然〉女神と出会う。ちょうど聖ヴァレンタインの日(5月3日)で、あらゆる種類の鳥が相手を求めて押しかけてくる。社会的地位の高い者から決めてゆくことになり、王様の雄鷲がまず発言する。1

羽の美しい雌鷲を恋して、

“Unto my soverayn lady, and not my fere,  
I chese, and chese with wil, and herte, and thought,  
The formel on youre hond, so wel iwrought,  
Whos I am al, and evere wol hire serve,  
Do what hire lest, to do me lyve or sterve;  
“Besekynge hire of merci and of grace,  
As she that is my lady sovereyne;

(416-22)

すると、それより身分の低い 2 羽の雄鷲が、1 羽ははったりめいた戦士のような発言、もう 1 羽は懐柔的な物言いで、1 羽の目立つ雌鷲にそれぞれ求婚する。これに対し普通の鳥たちは公聴会を求め騒ぎだしたので、〈自然〉女神は各々の鳥族から 1 羽ずつ代表として 4 組を選び意見を述べさせる。議長役の〈自然〉が意見をまとめ、裁定として王様の雄鷲を選ぶように忠告しながら、その選択権を雌鷲に与える。雌鷲はよく考えたいので 1 年の猶予をと申し出、これで漸くおさまる。その後で、他の鳥たちは相手を選び、ルーネデルを歌って飛び去っていく。この物音で語り手は目が覚めて、別の本を読みだす。

若いリチャード 2 世と王女アンとの婚約をめぐる書かれた作品といわれている。国王たる若者に何か教訓めいたものを書くよう求められて詩作したのだろう。『テセイダ』を読み続けているらしいが、さまざまな素材を使ってイタリア的な明るい庶民的雰囲気が出ている。ラテン語に負けないように「俗語」の英語を文学語として使うためには偉大な規範の模倣が根本原則となる。これまでラテン語とフランス語のイギリス宮廷社会にいたチャージャーは、先進国のイタリアに出掛ける機会に恵まれ、繁栄した文化都市に滞在して衝撃的な体験をしてきた。それによって彼の文学世界は大

きくふくらんだ。普通イタリア文化の影響は 1 世紀のちの現象である。それをチョーサーは中世末期の時代に現地について受け入れている。詩人 poet と呼ばれたい、著作家 auctor と呼ばれたい、それもヨーロッパの詩人と呼ばれたいと願った。漸く『鳥たちの議会』でダンテが求める水準に近づいた。

古代末期 6 世紀ボエティウスの『哲学の慰め』の英訳『ボエース』(1379-80) は複雑な翻訳法を取っている。14 世紀の「通俗」ラテン語テキスト、ジャン・ド・マンのフランス語訳、ニコラス・トリヴェットの注釈本その他を手許にならべ、しかも自分の解釈も入れた英語散文に直しているのである。次にボッカッチョの『フィロストラト』を種本にした『トロイルスとクリセイデ』(c.1381-86) が書かれる。これが彼の唯一の、一番完成度の高い作品かもしれない。古典以来伝統のあるトロイ物語群の中で展開される悲恋と戦争の叙事詩(悲劇)物語。その終わりのところで神に祈願する。

Go, litel bok, go, litel myn tragedye,  
Ther God thi makere yet, er that he dye,  
So sende myght to make in som comedye!  
But litel book, no makyng thow n'envie,  
But subgit be to alle poesy;e;  
And kis the steppes where as thow seest pace  
Virgile, Ovide, Omer, Lucan, and Stace.

(v. 1786-92)

Anne Middleton (1980) によれば、'poesy'e' とは古代詩人たち poets が作成した神話・伝説の宝庫、その文化的権威、金言・知恵の貯蔵庫、古典のモラルと哲学知識の庫である。従って中世の作家たちの主たる物語の素材となる。この 5 人の権威ある古代詩人の後に、6 番目の席に「現代詩人」



チョーサーが入りたい野心が見えている。最後の『カンタベリ物語』は1380年代の中頃から始められたが、未完で終わっている。カンタベリ大聖堂への巡礼を枠組として、『デカメロン』に似た、中世のさまざまな物語24篇と総序歌と取消し文がまとめられている物語集である。その中に「巡礼チョーサー」が語り手として2篇の物語をもって参加している。

\*本論は J. A. W. Bennett, Piero Boitani, David Wallace, Elizabeth Salter, Derek Pearsall, Donald Howard たちの研究を軸にすえ、これ迄の諸研究を参照しながら考え、行き着いた概略図である。チョーサーからの引用は、すべて Larry D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer* (Oxford, 1987, 1988) に依る。

## Bibliography

### (1) Primary sources and texts

- Benson, Larry D., ed. *The Riverside Chaucer*, Third edition, Oxford University Press, 1987, 1988.
- Bollettino, Vincenzo Z., trans. *Giovanni Boccaccio: The Life of Dante*, Garland Library of Medieval Literature, Vol. 40 Series B, Garland, 1990
- Bourchier, John, Lord Berners, trans. *The Chronicles of Froissart*, ed. G. C. Macaulay, The Globe Edition, Macmillan and Co., 1896, 1930
- Branca, Vittore, ed. *Giovanni Boccaccio: Caccia di Diana / Filostrato*, Oscar Classici Mondadori, Milano: Arnoldo Mondadori, 1990
- Brereton Geoffrey, trans. *Froissart: Chronicles*, Penguin Books, 1968, 1987
- Crow, Martin M. and Clair C. Olson, eds. *Chaucer Life-Records*, Oxford: Clarendon Press, 1966
- Fig, Kristen M and R. B. Palmer eds. and trans. *Jean Froissart: An Anthology of Narrative and Lyric Poetry*, Routledge, 2001
- Given-Wilson, Chris., trans. and ed. *Chronicles of the Revolution 1397-1400: The Reign of Richard II*, Manchester University Press, 1993

- Gordon, R. K. *The Story of Troilus*, New York: E. P. Dutton, 1964
- Griffin, Nathaniel E. and Arthur B. Myrick, trans. with parallel text, *The Filostrato of Giovanni Boccaccio*, New York: Octagon Books, 1929, 1978
- Havely, N. R., trans. *Chaucer's Boccaccio*, Cambridge: D. S. Brewer, 1980, 1992
- Horgan, Frances, trans. *The Romance of the Rose*, World's Classics, Oxford University Press, 1994
- Lecoy, Félix, ed. *Guillaume de Lorris et Jean de Meun: Le Roman de la Rose*, 3 tomes, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1965-70
- McCoy, B. M., trans. *The Book of Theseus*, New York: Medieval Association, 1974
- Phillips, Helen and Nick Havely, eds. *Chaucer's Dream Poetry*, Longman, 1997
- Wimsatt, James I. and William W. Kibler, eds. *Guillaume de Machaut: Le Jugement du Roy de Behaigne and Remede de Fortune*, The Chaucer Library, University of Georgia Press, 1988
- Windeatt, Barry A. *Chaucer's Dream Poetry: Sources and Analogues*, Cambridge: D. S. Brewer, 1982
- , ed. *Geoffrey Chaucer: Troilus and Criseyde*, Longman, 1984
- , ed. *Geoffrey Chaucer: Troilus and Criseyde*, Penguin Books, 2003

(2) Secondary sources

- Barber, Richard. *Edward, Prince of Wales and Aquitaine*, Allen Lane, 1978
- Bennett, J. A. W. *The 'Parlement of Foules': An Interpretation*, Oxford: Clarendon Press, 1957
- . *Chaucer's 'Book of Fame'*, Oxford: Clarendon Press, 1968
- Benson, Larry D. *Contradictions: From 'Beowulf' to Chaucer*, eds. Theodore M. Andersson and Stephen A. Barney, Scolar Press, 1995
- Blake, Norman F. *The English Language in Medieval Literature*. Methuen, 1979
- Boitani, Piero. *Chaucer and Boccaccio*, Medium Aevum Monographs, New Series 8, Oxford, 1977.
- . *English Medieval Narrative in the 13<sup>th</sup> and 14<sup>th</sup> Centuries*, Cambridge University Press, 1982, 1986
- , ed. *Chaucer and the Italian Trecento*, Cambridge University Press, 1983

- *Chaucer and the Imaginary World of Fame*, Cambridge: D. S. Brewer, 1984
- Boitani, Piero and Jill Mann, eds. *The Cambridge Companion to Chaucer*, Second edition, Cambridge University Press, 1986, 2003
- Branca, Vittore. *Boccaccio: The Man and His Works*, The Harvester Press, 1976
- Brand, Peter and Lino Pertile, eds. *The Cambridge History of Italian Literature*, Cambridge University Press, 1996
- Brewer, Derek S., ed. *Chaucer and Chaucerians*, Nelson, 1966
- *Chaucer and his World*, Cambridge: D. S. Brewer, 1978, 1992
- *A New Introduction to Chaucer*, Second edition, Longman, 1998
- Brown, Peter, ed. *A Companion to Chaucer*, Blackwell, 2000
- Burrow, John A. *Richardian Poetry: Chaucer, Gower, Langland and the 'Gawain' Poet*, Routledge and Kegan Paul, 1971
- *Medieval Writers and Their Work: Middle English Literature and its Background 1100-1500*, Oxford University Press, 1982
- Calin, William. *The French Tradition and the Literature of Medieval England*, University of Toronto Press, 1994
- Chance, John. *The Mythographic Chaucer: The Fabulation of Sexual Politics*, University of Minnesota Press, 1995
- Clemen, Wolfgang. *Chaucer's Early Poetry*, Methuen, 1963
- Coleman, Janet. *English Literature on History 1350-1400: Medieval Readers and Writers*, Hutchinson, 1981
- Coleman, William E. 'Chaucer, the *Teseida*, and the Visconti Library at Pavia: A Hypothesis', *Medium Aevum* 51 (1982): 92-101
- Cooper, Helen. *The Canterbury Tales* (Oxford Guides to Chaucer), Oxford: Clarendon Press, 1989, 1996
- Crane, Susan. *Insular Romance*, University of California Press, 1986
- Davenport, W. A. *Chaucer and His English Contemporaries*, Macmillan Press, 1998
- Dronke, Peter. *The Medieval Poet and His World*, Roma: Edizioni di Storia e Letteratura, 1984
- *Dante and Medieval Latin Traditions*, Cambridge University Press, 1986
- Edwards, Robert R. *Chaucer and Boccaccio: Antiquity and Modernity*, Palgrave, 2002

- Fansler, D. S. *Chaucer and the Roman de la Rose*, Peter Smith, 1965
- Fox, John. *A Literary History of France: The Middle Ages*, Ernest Benn, 1974
- Goodman, Anthony. *John of Gaunt: The Exercise of Princely Power in Fourteenth-Century Europe*, Longman, 1992
- Gray, Douglas, ed. *The Oxford Companion to Chaucer*, Oxford University Press, 2003
- Hay, Denys. *Europe in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*, 2<sup>nd</sup> edition, Longman, 1989, 1992
- Howard, Donald R. *Chaucer and the Medieval World*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1987
- Jacoff, Rachel, ed. *The Cambridge Companion to Dante*, Cambridge University Press, 1993
- Kirkpatrick, Robin. *English and Italian Literature from Dante to Shakespeare*, Longman, 1995
- Lansing, Richard, ed. *The Dante Encyclopedia*, Garland, 2000
- Lewis, C. S. *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, Oxford: Clarendon Press, 1936
- *Studies in Medieval and Renaissance Literature*, Cambridge University Press, 1966, 2000
- McKisack, May. *The Fourteenth Century 1307-1399* (The Oxford History of England), Oxford: Clarendon Press, 1959
- Middleton, Anne. 'Chaucer's "New Men" and the Good of Literature in the *Canterbury Tales*', *Literature and Society*, ed. Edward W. Said (The Johns Hopkins University Press, 1980), 15-56
- Minnis, A. J. *Chaucer and Pagan Antiquity*, Cambridge: D. S. Brewer, 1982
- *Medieval Theory of Authorship*, Second edition, Wildwood House, 1984, 1988
- *The Shorter Poems* (Oxford Guides to Chaucer), Oxford: Clarendon Press, 1995
- Muscatine, Charles. *Chaucer and the French Tradition*, University of California Press, 1956, 1964
- Nolan, Barbara. *Chaucer and the Tradition of the 'Roman Antique'*, Cambridge University Press, 1992

- Painter, Sidney. *French Chivalry*, Cornell University Press, 1957, 1977
- Patterson, Lee, ed. *Literary Practice and Social Change in Britain, 1380-1530*, University of California Press, 1990
- Pearsall, Derek. *Old English and Middle English Poetry*, Routledge and Kegan Paul, 1977
- . *The Canterbury Tales*, Allen and Unwin, 1985
- . *The Life of Geoffrey Chaucer: A Critical Biography*, Blackwell, 1992
- Phillips, Helen. *An Introduction to 'the Canterbury Tales': Reading, Fiction, Context*, Macmillan Press, 2000
- Robertson, D. W., Jr. *A Preface to Chaucer: Studies in Medieval Perspectives*, Princeton University Press, 1962
- . *Chaucer's London*, New York: John Wiley and Sons, 1968
- Rowland, Beryl, ed. *Companion to Chaucer Studies*, Oxford University Press, 1968
- Salter, Elizabeth. *Fourteenth-Century English Poetry: Contexts and Reading*, Oxford: Clarendon Press, 1983, 1984
- . *English and International: Studies in the Literature, Art and Patronage of Medieval England*, eds. Derek Pearsall and Nicolette Zeeman, Cambridge University Press, 1988
- Saul, Nigel. *Richard II*, Yale University Press, 1977, 1999
- Schless, Howard H. *Chaucer and Dante: A Reevaluation*, Norman, OK: Pilgrim Books, 1984
- Spearing, A. C. *Medieval Dream-Poetry*, Cambridge University Press, 1976
- St John, Michael. *Chaucer's Dream Visions: Courtliness and Individual Identity*, Ashgate, 2000
- Steel, Anthony. *Richard II*, Cambridge University Press, 1962
- Strohman, Paul. *Social Chaucer*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1989
- Taylor, Karla. *Chaucer Reads 'The Divine Comedy'*, Stanford University Press, 1989
- Thompson, N. T. *Chaucer, Boccaccio, and The Debate of Love*, Oxford: Clarendon Press, 1996
- Tuck, Anthony. *Richard II and the English Nobility*, Edward Arnold, 1973
- Vale, Juliet. *Edward III and Chivalry: Chivalric Society and Its Context 1270-1350*,

- Boydell, 1982
- Wallace, David. *Chaucer and the Early Writings of Boccaccio*, Cambridge: D. S. Brewer, 1985
- . *Giovanni Boccaccio: Decameron*, Cambridge University Press, 1991
- . *Chaucerian Polity. Absolutist Lineages and Associational Forms in England and Italy*, *Figurae: Reading Medieval Culture*, Stanford University Press, 1997
- , ed. *The Cambridge History of Medieval English Literature*, Cambridge University Press, 1999, 2002
- Waugh, Scott L. *England in the Reign of Edward III*, Cambridge University Press, 1991
- Wimsatt, James I. *Chaucer and the French Love Poets*, University of North Carolina Press, 1968
- . *Chaucer and His French Contemporaries*, University of Toronto Press, 1991
- Windeatt, Barry A. *Troilus and Criseyde* (Oxford Guides to Chaucer), Oxford: Clarendon Press, 1992

(3) 日本語文献

- アンドレーアース・カペラーヌス (瀬谷幸男訳) 『宮廷風恋愛について』南雲堂、1993
- ピエール＝イヴ・バデル (原野 昇訳) 『フランス中世の文学生活』白水社、1993
- チョーサー (塩見知之訳) 『チョーサーの夢物語詩』高文堂出版、1981
- ジェフリー・チョーサー (宮田武志訳) 『善女よもやま話』大手前女子学園アングロノルマン研究所、1982
- ジェフリー・チョーサー (宮田武志訳) 『トゥローイラスとクリセイデ』こびあん書房、1985
- チョーサー (西脇順三郎訳) 『カンタベリー物語』上・下、ちくま文庫、1987
- チョーサー (樋口昌幸訳) 『哲学の慰め』溪水社、1991
- チョーサー (榎井迪夫訳) 『完訳カンタベリー物語』(上)(中)(下) 岩波文庫、1995
- チョーサー (笹本長敬訳) 『チョーサー初期夢物語詩と教訓詩』大阪教育図書、1998

- , (笹本長敬訳)『カンタベリー物語 (全訳)』英宝社、2002
- チョーサー (田中幸穂訳)「G. チョーサー《鳥たちの議会》の訳」『片平』39号  
論文集、2004年3月
- フィリップ・コンタミーヌ (坂巻昭二訳)『百年戦争』文庫クセジュ、白水社、  
2003
- E. R. クルツイウス (南大路振一、岸本通夫、中村晋也訳)『ヨーロッパ文学とラ  
テン中世』みすず書房、1971
- ジョヴァンニ・ボッカッチョ (岡 三郎訳)『フィロストラト』トロイア叢書3、  
国文社、2004
- ドミニック・ブーテ、アルマン・ストリユーベル (神澤栄三訳)『中世フランス  
文学入門』文庫クセジュ、白水社、1983
- ダンテ (平川祐弘訳)『ダンテ神曲』河出書房新社、1992
- ジョルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー (前川貞次郎、鳴岩宗三訳)『フ  
ランス文化史 I』人文書院、1969
- 市河三喜『Chaucer』研究社英米文学評伝叢書1、研究社、1936
- 池上忠弘「The Gothic Structure of Chaucer's *House of Fame*」『成城文芸』105号  
(1983)、成城大学文芸学部、27-38頁
- , 「バースの女の結婚談義」繁尾 久編『「バースの女房」をめぐる ― チ  
ョーサー カンタベリー物語』シリーズ「中世英文学シンポジウム」第2集  
(1985)、学書房、101-22頁
- , 「チョーサーとスペイン」『地中海学会月報』122号(1989)、地中海学会
- , 「チョーサーの詩的冒険 ― 愛と美と死の哀歌」都留久夫編『チョーサーの  
「公爵夫人の書」を読む』シリーズ「中世英文学シンポジウム」第5集  
(1991)、学書房、114-41頁
- , 「中世物語文学の伝承と受容」『ルネッサンスニュース』13号(1993)、ルネ  
ッサンス研究所、23-24頁
- , 「チョーサーのイタリア」『ルネッサンスニュース』19号(1999)、ルネッサ  
ンス研究所、12-13頁
- , 『粉屋と学生の知恵くらべ ― Chaucer's *Reeve's Tale* をめぐって』都留久夫編  
『虚構と真実』桐原書店、2000、47-60頁
- 訳「チョーサー『カンタベリー物語 総序歌』1-6」『詩と散文』67-72号、永

田書房、2000-2002

ダンテ（岩倉具忠訳）『ダンテ俗語詩論訳注』東海大学出版会、1984

岩倉具忠、清水純一、西本晃二、米川良夫『イタリア文学史』東京大学出版会、1985

河崎征俊『チオーサー文学の世界』南雲堂、1995

近藤 恒『ペトラルカ — 生涯と文学』岩波書店、2002

J. ラフィット=ウサ（正木 喬訳）『恋愛評定』文庫クセジュ、白水社、1960

ギョーム・ド・ロリス、ジャン・ド・マン（篠田勝英訳）『薔薇物語』平凡社、1996

C. S. ルーイス（玉泉八州男訳）『愛とアレゴリー』筑摩書房、1972、1976

C. S. ルイス（山形和美監訳）『廃棄された宇宙像』八坂書房、2003

マリーナ・マリエッティ（藤谷道夫訳）『ダンテ』文庫クセジュ、白水社、1998

奥田宏子『チオーサー 中世イタリアへの旅』御茶の水書房、2003

アンリ・オヴェット（大久保昭男訳）『評伝ボッカッチョ』新評論、1994

繁尾 久編『「バースの女房」をめぐる — チオーサー カンタベリ物語』（シリーズ「中世英文学シンポジウム」第2集）学書房、1985

都留久夫編『チオーサーの「公爵夫人の書」を読む』（シリーズ「中世英文学シンポジウム」第5集）学書房、1991

---- 編『虚構と真実 — 14世紀イギリス文学論集』桐原書店、2000

野上素一（訳書）『ダンテ 神曲物語』現代教養文庫、社会思想社、1968、1988